

性と人権

元橋利恵

近年、性をめぐる知識はすさまじいスピードで更新、展開されている。それに伴い、従来は自明視されていた性差や権利についての常識は問い直され、議論は活発化している。例えば、性別とは何か？からはじまり、性的マイノリティの人の置かれている社会的環境、セクシュアル・ハラスメントやマタニティ・ハラスメントなど女性の学習環境や職場環境の問題、そして#MeToo運動に象徴されるような性暴力の問題、など多くを挙げることができよう。これらは、私たち全ての人に関わる問題でありながらも、実際には、専門分野を超えて正確な知識や議論が得られる場は限られている。

一方、性を正面から扱ってきたジェンダー、セクシュアリティ研究への、「ほんとうの学問ではない」という軽蔑も根強い。ジェンダー論はサイエンスとは呼べない、主観に満ちたものである等といった攻撃は、特に2000年代以降にジェンダー平等を希求する動きへの反発として起きたバックラッシュにもみられる。そこでは、「ジェンダー論は性差や自然を否定する」という誤解や、既存の性別役割分業は「自然の摂理」といったようなことが「科学的」で「学術的」な装いをもって展開されてきた。2020年現在でも、セクシュアルマイノリティの権利や性暴力への抵抗、「慰安婦」問題の解決、保育園運動など様々な「性と人権」をめぐる運動の高まりに対しては、反発や攻撃も高じている。このような科学的知識の誤用や歪曲に対して、いかに抗していくかが今なお科学者集団に問われている。

これまで本誌では、1997年に「現代社会とジェンダー」、2006年に「セクシュアル・ハラ

スメント」、2011年に「学術分野の男女共同参画」、2017年に「女性研究者の出産・子育て」といったように、特定のテーマに沿ったかたちで「性と人権」を取り上げてきた。本特集は、これまでの取り組みを引き継ぎつつ、以下の理由から、「性と人権」というタイトルとした。第一に、性と人権をめぐる情報をアップデートさせ、現代の課題を示すこと。第二に、すでに関心のある人だけにしか読まれないことを避けるため、科学技術、研究者支援、家族、アイデンティティ、性の商品化、戦時性暴力といった様々なテーマを集めたこと、そして第三に、理系文系それぞれの研究者に執筆いただいたことである。まさにオールジャンルの研究者が集う『日本の科学者』だからこそ取り組めた企画であると考えている。また、本特集はこれらの分野にはじめて接する読者にとっても読みやすいものになるように心掛けられたものになっている。

本特集の執筆者は、その多くが各分野で活躍されている女性の研究者である。他分野の特集となると男性執筆者で埋められることも少なくないなか、ポジティブに捉えられることである。しかし一方で、それは、ジェンダーやセクシュアリティに関わる研究が、日本社会の中で「女性だけの問題」とされ、いわば「ブランド」として扱われることはあっても、真には力を持ってこなかったことの現れであるともいえる。

なぜ日本社会において、ジェンダー平等がなかなか進展しないのか、本特集が分野を超えた多くの方に読まれ、思考し変革する材料を提供することができれば幸いである。

(もとはし・りえ：大阪大学、
社会学、ジェンダー論)